

経緯の間に、上海の温度を一節織り上げる



毛糸

的ま
 面す
 平で
 た術
 つ技
 、わ統
 い備伝
 、使ねる
 はを兼げ
 と針が上
 「み値り
 み編価作
 編なの左
 系々美物
 毛様とみ
 「と性編
 系用な
 毛実的
 り体
 よ立
 には
 業た
 作
 手

毛糸編みの花——上海のぬくもり

小红书

小红书号: corbyn555



針を動かすたびに、
陽の光が工房に差し込む午後、
彼女たちの物語の一つひとつ。
毛糸に紡がれた想いや力のすべてに、
巧手ママたちは、
手仕事で「夢中」を紡いでいる。
ゆっくりと流れる、やさしい声で、
そっと教えてくれるのは、
これは単なる無形文化遺産の技術ではなく、
あたたかい物語なのだと。



針に糸を通す彼女たち

劉曉梅さんは1971年、「編み物の里」と呼ばれる江蘇省海安県に生まれました。6歳から編み物を始め、その後、楊浦区に定住してから「巧手ママ工房」に参加しました。現在は、巧手ママ工房の中心メンバーとして活躍しています。

2010年に楊浦区婦女兒童活動センターによって「巧手ママ工房」が設立されたことは、劉曉梅さんの編み手としての歩みにおける大きな転機となりました。この公益に結びついた活動の場は、地域に散在していた編み物ファンをまとめ、劉さんの技術向上にも新たな可能性を与えることとなります。センターのサポートのもとで、劉さんは個人で加工注文を受けるだけの職人から、編み物の技術を伝える伝播者へと転身しました。積極的に地域に溶け込み、編み物の無料講習を開き、さまざまな編み物コンテストで審査員を務め、社会貢献活動にもよく参加しています。こうした取り組みを通じて、劉さんは自分の優れた技術を地域みんなで共有できる文化財へと変えました。また、伝統的な編み物を現代の感性に合わせるため、上海で開かれるさまざまな編み物の展示会を参観し、都会のファッション感覚を吸収しながら、伝統技法と現代的な美意識が交わる中で、毛糸編みの新たな可能性を模索し続けています。



針に糸を通す彼女たち

2010年、楊浦区の「巧手ママ工房」は区婦女連合会の指導のもとで設立されました。海派（ハイパイ）毛糸編み技術を絆として、「センター—コミュニティ—居民委員会」の三層が連携する体制を築き上げたのです。この女性による無形文化遺産ブランドは、それまで顔も知らなかった地域の住民たちを編み物を通じて結びつけました。マンションや街並みを助け合いの心が働くあたたかな共同体へと紡ぎ出し、楊浦区のコミュニティ文化づくりの生きた手本となっています。



伝えた一針

2022年の北京冬季オリンピック・パラリンピックの際、巧手ママ工房が制作した毛糸の「チャイナレッドのバラ」が、表彰台に華を添えました。この作品は工房のマイルストーンともいえ、1000人を超える職人たちの技と使命感が込められており、中国の無形文化遺産の魅力を世界に示すものとなりました。

バラには、高品質な「チャイナレッド」の毛糸が使われており、鮮やかな色合いがオリンピックの雰囲気と伝統文化の趣を引き立てます。製作は全て手作業で、1本あたり少なくとも6時間をかけて仕上げられています。一枚一枚がはっきりとした花びらは、生き生きとした形に作られており、茎の絨毛に至るまでリアルに再現しています。その精細さは、一般的な編み物をはるかに超えています。

この毛糸のバラは、国内外52のメディアに取り上げられ、毛糸編みを世界へと広めるきっかけとなりました。それは単なる手作りの傑作だけでなく、中国の女性たちの覚悟と誇り、そして家庭と国を思う心が込められた存在なのです。

私たちの 毛糸編み

故郷とのより深い心のつながり

実践チームのメンバーである張纖惠（ZHANG XIANHUI）さんにとって、今回の活動は貴重な経験となりました。

「この活動は、机の上の知識を離れ、フィールドワークを通じて実際に伝統文化の知恵や魅力を感じ取る機会を与えてくれました。同時に、自分の実践力やコミュニケーション能力を高めることにもつながりました。毛糸編みの文化は、上海という土地が育んできた文化の粋でもあります。上海出身の私にとっては、この活動に参加すること自体が、故郷であるこの街への理解をより深め、より強い心の絆を結ぶことにもなるのです。」

彼女は、毛糸編みとの初めての出会いをこう振り返ります。

「あの日、初めて工房を訪れた時、先生は椅子に腰かけ、指を忙しなく動かしながら新しい作品を編んでいました。街路樹の葉の間から差し込む日差しが、毛糸の上に降り注いでいて、その穏やかで美しい光景に、私は一瞬で心を奪われました。この街には、高層ビルが立ち並ぶ風景のほかに、こんなに温かい場所もあり、毛糸で紡ぐ物語が息づいているのだと、その時初めて気づいたのです。」